

平成31年度入学（一般入試 後期日程）試験問題の出典

社会福祉学部

種別	大問番号	著者名	著作物名	書名等	版元
小論文	—	高橋 源一郎	101年目の孤独 —希望の場所を求めて—	岩波書店, 2013年より pp.113-118	岩波書店

平成 31 年度 一般入試・後期

## 社会福祉学部

# 小論文 (90分)

### 注意事項

- 1 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
- 2 この冊子は、3 ページあります。なお、下書き用紙が 2 枚あります。
- 3 試験中に問題冊子及び解答用紙の印刷不鮮明、ページの脱落などがあった場合は、手を挙げて試験監督者に知らせなさい。
- 4 解答は、必ず黒鉛筆(シャープペンシルも可)で記入し、ボールペンや万年筆などを使用してはいけません。
- 5 解答用紙には、氏名及び受験票と同じ受験番号を忘れずに記入しなさい。
- 6 解答は、必ず解答用紙の指定された箇所に記入しなさい。
- 7 下書きの必要があれば、下書き用紙を利用してかまいません。
- 8 試験終了後、問題冊子と下書き用紙は持ち帰りなさい。

次の文章を読み、あとの問いに答えなさい。(配点 200 点)

次男が、急性脳炎で国立成育医療センターに運ばれたのは、2009年の正月だった。その時、次男は2歳の終わりを迎えていた。体調を崩し、大晦日に近くの病院に連れていった。診断は「風邪」であった。急変したのは帰宅し、寝てからだった。明け方には、麻痺が広がり、意識が朦朧とした。元日、慌てて、前日の病院に行くと、同じ医師が「急性脳炎だと思うが、ここでは治療できない」として、救急車を呼んだのである。

成育医療センターに運ばれた次男はただちに脳の検査を受けた。医師は、わたしと妻を別室に呼び、こう告げた。

「お子さんは、たいへん重篤な状態です。急性の小脳炎だと思います。これから、治療を開始しますが、このまま亡くなる可能性が3分の1、助かったとして重度の障害が残る可能性が3分の1だと考えてください」

わたしには、医師がしゃべっていることばの意味がよくわからなかった。作家であるにもかかわらず、自分が誰かの作品の登場人物になって、他の登場人物の台詞を聞かされているような気がした。

医師との面談が終わるとNICU(小児用集中治療室)にいる次男のところに行った。次男はオムツだけにされ、四肢を何かで固定されていた。意識はほとんどなく、獣のようなうめき声だけが聞こえた。

そして、わたしと妻は、一度、帰宅した。用意すべきことがいくつもあったからだ。わたしは一晚、考えた。そのいくつかは、愚かなことだった。自分の思考を愚かだ、と思いながら考えた経験は、ほとんどなかった。たとえば、次男がこれからずっと寝たままで生涯を過ごすとして、いくら経費がかかるか、わたしが死んでからなおどれほどの年月、彼は生きねばならぬかを考えた。わたしに財産はないに等しい。わたしは、半ば本気で銀行強盗でもするしかないのか、と思った。要するに、わたしはパニックに陥っていた。

それからまた別のことを考えた。重度な障害の残った次男は、どんな生活をおくることになるのか。教育はどうなるのか。「ふつうの」教育を受けさせることしか頭になかったわたしには、その方面の知識が完全に欠けていた。いや、おそらく、こんな状況に陥らなければ、誰でも、その知識が欠けていることさえ知らないのである。

翌朝、わたしは、それがどのようなものであろうと、事実を受け入れるべきだと考えるに至った。そして、その瞬間、不思議なことに、いままで考えたことのないような深い喜びを感じた。

いま思えば、その夜、わたしはキューブラー＝ロスが言った「死を受け入れる5つの段階」を経験したのだ。否認(なぜ、彼が死んだり、障害者にならなければならないのか)→怒り(彼にはなんの咎もないのに)→取引(わたしはどうなってもいいから、彼を元に戻してほしい)→抑鬱(もう耐えられない)→受容(この事実を認め、どうやって彼と共に生きてゆくかを考えよう)である。

子どもの死は、わたしにとって、自身の死に匹敵するものだったのだろうか。あるいは、解決できない難問を前にすると、わたしたちはいつも「死を受け入れる5つの段階」と同じステップを踏んで考

えるしかないのだろうか。

わたしは、次男が死ぬまで身動きできず、ことばも話せないという状態になったとして、最後まで支えることを決めた。「決めた」というのは、おかしな表現かもしれない。それは、「責務」だろうか？違う、とわたしは感じた。

わたしたちにとって義務や仕事の多くは「わたしではなく、他の誰か」でも代替可能なものだ。だが、その次男を支えて生きることは「他の誰かではなく、わたしたち親」に対して、捧げられた仕事なのだ、と感じた。わたし(たち)にしかできない仕事、あるいは義務、それは喜ばしいものではないだろうか。

わたしは、1日かかって、その結論に達し、そのことを妻に告げた。すると、妻は呆れたように「そんなことを1日考えてたの？」といった。わたしが1日かかってたどり着いた結論に、妻は、医師の宣告から数分でたどり着いていたのである。

その後の、次男の入院生活についてはここでは書かない。彼は、医師も驚くほど急激に、かつ奇跡的に回復した。小脳炎の後遺症と思われるものは残っているが、日常生活に支障をきたすことはない。そういう意味では、わたしの心配は杞憂に終わったのである。

(中略)

その後、わたしは、いくつもの施設や人びとを訪ねるようになった。あるいは、そんな人たちのことを調べるようになった。

ダウン症の子どもたちのアトリエ、クラスも試験も宿題もない学校、身体障害者ばかりの劇団。それから、重度の障害者を育ててきた親たちが、そんな彼らのために国や県を動かして作った施設、あるいは、平均年齢が60歳を超える過疎の島で原発建設に反対する人たち、認知症の老人たちと共に暮らし最期まで看取ろうとしている人たち。あるいはまた、夜になると公園や駅の近くを歩き回り、病気のホームレスたちを探し、施設に入れ、あるいは彼らの行く末を考えている人たち。

ひとつの単語にすれば「弱者」ということになってしまうだろう、彼らのいる場所を訪ねるようになった理由の一つに、好奇心があることは否定しない。

けれど、もっと大きな理由は、別にある。いや、大きな理由が他にあったことに、わたしは、途中で気づいた。それは、その「弱者」といわれる人たちの世界が、わたしがもっとも大切にしてきた、「文学」あるいは「小説」と呼ばれる世界に、ひどく似ていることだ。

彼らの住む世界は、わたしたちの世界、「ふつう」の人びと、「健常者」と呼ばれる人びとの住む世界とは少し違う。彼らは、わたしたちとは、異なった論理で生きている。一見して「弱く」見える彼らは、わたしたちの庇護ひごを必要としているように見える。

だが、彼らの世界を歩いていて、わたしたちは突然、気づくのである。彼らがわたしたちを必要としているのではない、わたしたちが彼らを必要としているのではないか、ということに。

彼ら「弱者」と呼ばれる人びとは、静かに、彼らを包む世界に耳をかたむけながら生きている。彼らは、あくせくしない。彼らには、決められたスケジュールはない。彼らは、弱いので、ゆっくりとしか生きられない。ゆっくりと生きていると、目に入ってくるものがある。耳から聞こえてくるものが

ある。それらはすべて、わたしたち、「ふつう」の人たちが、見えなくなっているもの、聞こえなくなっているものだ。また、彼らは、自然に抵抗しない。まるで、彼ら自身が自然の一部のようになる。わたしたちは、そんな彼らを見て、疲れて座っているのだ、とか、病気で何も感じることができなくなって寝ているのだ、という。そうではないのだ。彼らこそ、「生きている」のである。

②  
「文学」や「小説」もまた、目を凝らし、耳を澄まさなければ、ほんとうは、そこで何が起きているのか、わからない世界なのだ。

(高橋源一郎『101年目の孤独—希望の場所を求めて—』pp.113-118, 岩波書店, 2013年より, 一部改変)

問 1 作者はなぜ、下線部①「いままで考えたことのないような深い喜び」を感じたのか。本文の内容に即して80字以上100字以内で説明しなさい。

問 2 作者が、下線部②「彼らこそ、「生きている」のである」と主張する理由と、それに対するあなたの考えを、600字以上800字以内で述べなさい。